

発見! 全国の **ほ**っとポイント

# 専門性の高い チーム医療を推進

愛知県名古屋市 名古屋<sup>えきさい</sup>掖済会病院

薬剤部副薬剤部長  
なかむらさとし  
**中村敏史**先生

糖尿病・内分泌内科部長  
よしだまさのり  
**吉田昌則**先生

薬剤部薬剤部長  
いけがみのぶあき  
**池上信昭**先生

専門職による外来指導で  
患者さんをサポート

名古屋掖済会病院は、糖尿病・内分泌内科を含む29の診療科を有する、名古屋市南部地区の基幹病院です。中でも大きな柱となっているのが、生活習慣が原因で起こる2型糖尿病の診療です。

「現在、2型糖尿病で通院している患者さんの約3割がインスリンを注射し、それ以外の患者さんは経口薬を服用しています。最近は経口薬の

新薬が多く出てきました。初診では糖尿病という疾患についての説明を、診察では服薬指導や副作用の説明、食事や運動などの生活指導を行います。ですが、限られた時間の中では全てを説明し尽くせるわけはありません。特に十分な生活指導を行えないのが現状です」と糖尿病・内分泌内科部長の吉田昌則先生。

そこで同院では、2008年2月に看護外来を開院し、2013年9月には副薬剤部長の中村敏史先生が中心となり、糖尿病の患者さんを対象にした「薬剤師糖尿病指導外来」を開院。それにより、糖尿病療養指導士の資格を有する薬剤師や看護師が、食事の摂り方や運動の仕方、薬の作用などについて詳しく指導を行える体制が整いました。

「医師には話しにくい内容でも、普段顔を合わせている薬剤師や看護師なら相談できることも。また薬剤師が服薬状況や生活習慣を把握すること、のみ忘れなどによる残薬調整や処方提案について

も、リアルタイムに処方に反映できるメリットがある」と中村先生は言います。

指導外来の設置により、通院でも教育入院をした場合と同等の生活指導や服薬指導を受けることができるように。その結果、患者さんの負担も少なく、病院側でもより多くの患者さんを受け入れられるようになりました。

## 「薬・薬連携」による 更なるサポート体制

また同院では、地域の調剤薬局と連絡を取り合い、患者さんの情報交換を行う「薬・薬連携」も進めています。

「かかりつけ薬局」だからこそ、患者さんの体や生活の変化に気づくことがあります。かかりつけの薬剤師さんから



指導外来では、1人につき30分ほど時間をかけて薬の作用と食事、運動を関連づけて説明。患者さんは理解した上で治療を進めることができます。



待合室では、糖尿病の療養に関するパンフレットやレシピを配置・配布しています。

薬を受け取る際に聞くちよつとしたことが、患者さんの意識づけになることもあります」と薬剤部長の池上信昭先生。

「糖尿病は、生活習慣の改善や服薬など、患者さん自身で治療を進めていかなくてはならない疾患です。医療従事者はそのお手伝いをするに過ぎません。患者さんが納得して治療を進められるよう、チームで力を合わせてサポートしていくことが大切。今後さらにチーム医療を強化していく予定です」と皆さんで展望を語ってくださいました。